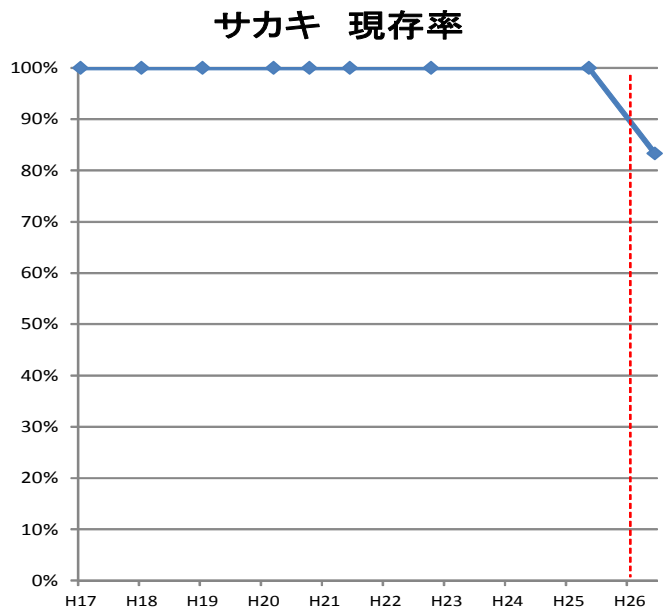
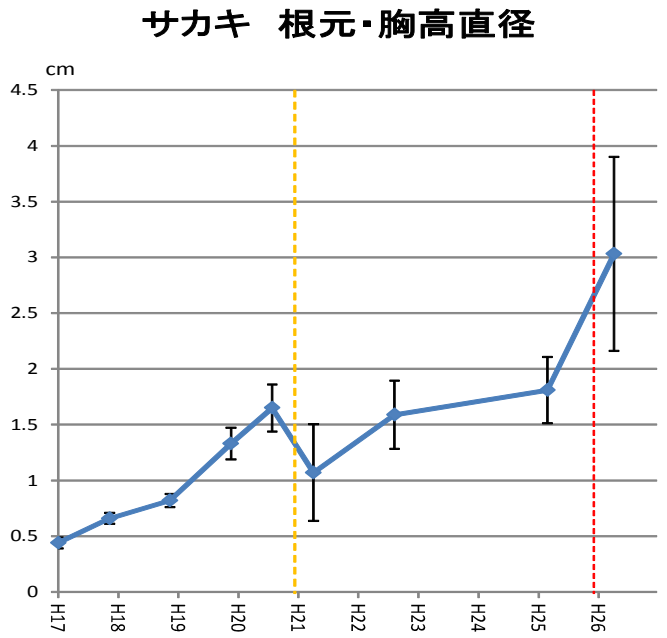
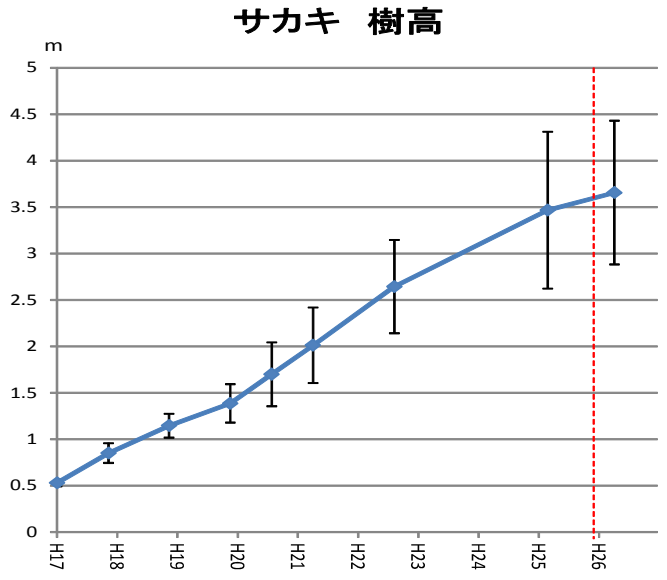
樹種名	サカキ
科　目	ツバキ科
学　名	*Cleyera　japonica*
分　布	茨城県・石川県以西から四国、九州、国外では済州島、台湾、中国に分布する。ヒマラヤと中国南部には、別亜種が見られる。
樹木特性	陰樹である。 山地に自生し、神社にも良く植えられ、枝葉を神事に使われる。
用　途	器具材として利用。枝は神事に利用。
植栽本数 （植栽密度）	36 本 （他樹種との混植）
特　徴	【樹　形】 常緑性の小高木。低木を見ることが多いが、高さ 12m、胸高直径は 30cm になるものがある。 樹皮は暗褐紅色。枝先の芽は裸で、若葉が巻いて鎌状になる。 葉は二列生の互生で、厚みのある革質、のっぺりとした表面で、鋸歯は全くなく、きれいな楕円形である。裏面はやや色薄く、両面ともに無毛である。 6 月ごろ側枝の基部の側の葉腋から白い小さな花を咲かせる。花は 1~4 個が束状に出て、いずれも葉の下に出て、下向きに咲く。11 月ごろには黒くて小さな液果を付ける。
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後から病虫獣害等も特に見られず、現存率も 83 %と高い結果となっている。成長量も大きくはないが順調に生育している。
被　害	特になし。







【現存率】

植栽後、選定した調査木は、自然枯死は無く H25.6 時点で現存率は 100 %である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 83.3%であった。

※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 3.03 ㎝であった。

※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※　オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

【樹　高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 3.66m であった。

※　赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

《プチ情報》

サカキ（榊、Cleyera　japonica）は、ツバキ科サカキ属の常緑小高木。神棚や祭壇に供えるなど、神道の神事にも用いられる植物。

日本では古くから神事に用いられる植物であり、「榊」という国字もそこから生まれた。

古来から、植物には神が宿り、特に先端がとがった枝先は神が降りるヨリシロとして若松やオガタマノキなど様々な常緑植物が用いられたが、近年は、もっとも身近な植物で枝先が尖っていて神のヨリシロに相応しいサカキやヒサカキが定着している。

家庭の神棚にも捧げられ、月に 2 度、1 日と 15 日（江戸時代までは旧暦の 1 日と 15 日）に取り替える習わしになっている。神棚では榊立を用いる。

田舎などでは庭先に植えている家庭が多い。また、常緑樹でもあることから庭木としても使われていることがある。サカキの語源は、神と人との境であることから「境木（さかき）」の意であるとされる。常緑樹であり繁えることから「繁木（さかき）」とする説もあるが、多くの学者は後世の附会であるとして否定している。

混同されやすいので、榊は「本榊（ホンサカキ）」とも呼ばれ、ヒサカキについては、「シャシャキ」「シャカキ」「下草」「ビシャコ」「仏さん柴（しば）」「栄柴（サカシバ）」などと地方名で呼ばれることもある。